

東北アジア学術交流懇話会ニュースレター

うしとら

第 79・80 号

● Contents ●

論点：国内拠点の国際学術ジャーナルは必要か？	辻森 樹	1
Topic: Why is the domestic-based 'international' journal necessary?	(TSUJIMORI Tatsuki)	1
東北アジア通信：東北アジアを造り出す太平洋プレート	平野 直人	3
Northeast Asian Reports:		
The Pacific Plate creating Northeast Asia	(HIRANO Naoto)	3
会員の広場：データは生き続ける	後藤 章夫	4
Members' Forum: Data remains forever	(GOTO Akio)	4



国内拠点の国際学術ジャーナルは必要か？

東北アジア研究センター教授（地球化学研究分野）

辻森 樹



2020年1月より、外資系大手の学術書籍出版社が「国内を拠点として刊行する」国際学術ジャーナルの編集長を務めることになった。これまでに7誌の国際学術ジャーナルの編集に関わってきたが、編集長（編集委員長）は初めての経験である。創刊から四半世紀を超えた歴史と伝統に敬意を表しながら、もう1人の編集長の先生とジャーナルの発展に尽力しているところである。小論では国際学術ジャーナルを取り巻く最近の動向を紹介し、国内拠点の国際学術ジャーナルの存在意義について論じたい。

自然科学の分野において、研究者が研究成果を執筆し、学術ジャーナルに投稿、ピアレビュー（専門家による査読審査）を経て学術論文として公表していくことは生業であろう。学術論文として研究成果を公表することではじめて先人らが積み上げてきた知識体系のなかに新知見が組み込まれ、その知見は研究史の一部となって知識体系を未来へ進化させる。研究活動は、知的好奇心の探求において小学校の自由研究と似た側面もあるが、アカデミアにいる研究者が税金や学費で生かされていることを考えれば、必然的に研究成果を創出していくしかなく、現状で信頼性を担保しながら研究成果を公表することが可能なメディアはピア

レビュー付きの学術ジャーナルしかない。学術団体等が主催する会議・学術大会（いわゆる学会）で数十回発表しようが、学術論文として公表しないかぎり（特許権の取得を除いて）誰も学術研究活動と見なすことはできず、たとえ新知見や驚くべきデータがあったとしても、闇に埋もれて陽の目をみることはない。研究者が生涯のうちで学問へ献身できる時間は努力しても 10^5 （10の5乗）時間に達するかどうかで、 10^5 時間という限られた時間のなかで輝ける時間はさらに桁で短い。

さて、学術ジャーナルが信頼性の担保された学術情報流通において決定的に重要であることは自明である。しかし、その出版形態はこの四半世紀の間に大きな変貌を遂げた。90年代後半にはインターネットの普及と電子文章ファイルの標準規格誕生によって、紙媒体の学術ジャーナルを通じた論文発表の時代から、電子ファイルとして掲載、閲覧できる時代が訪れた。70年代生まれの私はその大きな変貌を遂げた移行時代に初期キャリアを歩んできた世代であり、印刷原稿の郵送による論文投稿を経験している。海外の知名度の高い国際学術ジャーナルへの投稿には今とは比べられないほど時間を要し、国内拠点の国際学術ジャーナ

ルには迅速さの点で大きな価値があった。しかし、既存の紙媒体ジャーナルがほぼ電子化され、冊子体を持たないオンラインのみの学術誌（電子ジャーナル）が多数創刊されると、海外拠点の国際学術ジャーナルへの論文公表が格段に身近なものになった。国産学術ジャーナル不遇時代の幕あけである。学術ジャーナルのオンライン化が学問の変化と学界の競争を猛烈に加速させ、結果的に学術論文公表におけるスピードの重要性は大きく増した。保守的な国産学術ジャーナルは迅速さで完敗し、私も含めて、それに不満を持った利用者が離れた。これは国内の成熟していないピア・レビュー文化にも少なからず原因があったのかもしれない。

近年、無数の電子ジャーナルの競合は文献引用影響率の呪縛、購読契約料の高騰、オープンアクセスの潮流、捕食出版ビジネス等の新たな問題等を生み出した。その一方、網羅的な学術情報の検索は複雑系を取り扱う自然科学分野の情報収集に大きな革新をもたらした。論文数激増のなかでプレプリントサーバ利用が急速に拡大し、ピア・レビューに先立ち研究成果を事前公開する文化も広まっている。学術ジャーナルを取り巻く環境はこの先もダイナミックに変化していくであろう。このような大きな流れのなかで、国産国際学術ジャーナルの不要論は確かに存在する。しかし、自然科学の研究分野において、海外拠点の国際学術ジャーナルの編集チームにどれほどの日本人研究者がいるだろうか？先進国を自称し、知を創出する立ち位置であれば、学術ジャーナルにおいても存在感が必要であろう。国産国際学術ジャーナルを持つことにより、若手・中堅研究者がそこで編集経験を積むことで、この先世界の学術ジャーナルで新しい流れを作り得る人材育成の場としても機能するはずだ。私は全ての国際学術ジャーナルには、優れた研究を国際発信するプラットフォームとしての価値があると考えている。知を創出する立ち位置として、また科学の主導権という観点からも国際競争力があり、変化に柔軟に対応可能なプラットフォームを国内に継続して持つことに大きな意味がある。

最後に、編集長に就任してから取り組んできた改革について少し触れておこう（図1）。自然科学の分野では近年益々、研究の質に加えてスピードが重視される。その傾向は知識体系の急速な進化と相補的な関係にあって、研究成果の執筆から学術ジャーナルへの迅速な掲載、すなわち新知見の迅速な情報流通が、関連分野の発展を後押ししている。迅速な掲載は優れた若手研究者のキャリアアップにも少なからず影響を与えている。このような背景を踏まえ、原稿投稿からピアレビュー、改訂を経て受理（掲載可否の決定）、掲載に至るさまざまな手順、ワークフローを再検討した。結果的に受理の3日後には未校正原稿にDOI（デジタルオブジェクト識別子）が付与され、その電子ファイルが掲載される。そのリンク先は出版社のWebページだけでなくSNSからも発信される（図2）。投稿から掲載までのプロセスでもっとも時間が必要なピアレビューについても、それが迅速に進むよう、編集長が編集委員を兼ねるケースを増やし、適切な査読者を積極的に見つけられる体制とした。科学の進歩の加速は想像を超えており、膨大な知見の蓄積を学術ジャーナルが担っている。学術ジャーナルの機能を含めて学術情報流通の在り方そのものが大きく変化するなかで、国産学術ジャーナルを孤立させることなく、世界に誇れる学術ジャーナルとして育てたい。

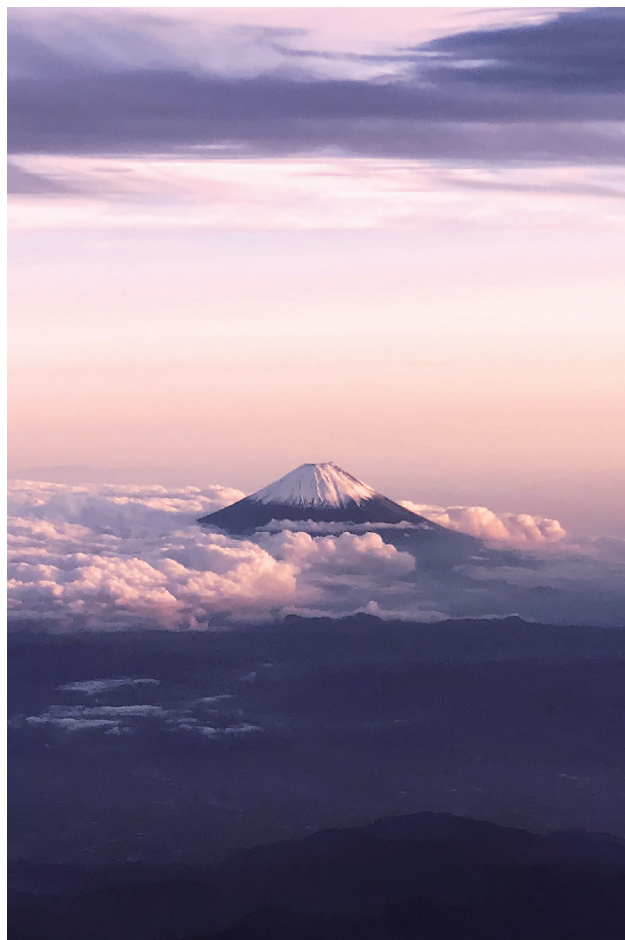


図1. 編集長を務める国際学術雑誌の新表紙デザインに用いた写真（仙台発・大阪 伊丹行き空路からスマートフォンで撮影）。日本人の多くは富士山の美しい姿を見るたびに誇らしい気持ちになる。西に向かって飛んでおり、簡単には陽を沈ませないという想いも込められている。

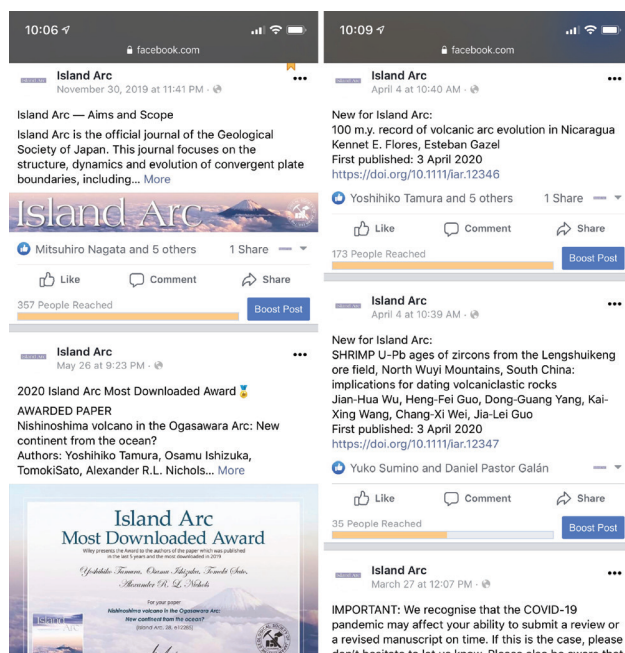


図2. 掲載までのワークフローを大幅に改善し、受理後の迅速な掲載情報はSNSでもタイムリーに発信される。<https://www.facebook.com/IAR.editorial/>